

自尊感情の 2 因子と 2 種類の自己愛の関連性

福留広大・森永康子

Cluster analysis of two factors of self-esteem and two types of narcissism in Japanese: How are unbalanced positive and negative aspects of self-esteem related to narcissism?

Koudai Fukudome and Yasuko Morinaga

The present study sought to reveal the relationship between two types of narcissism (grandiose and hypervigilant) and the positive and negative wording items (PSE and NSE) of Rosenberg's self-esteem scale (RSES). We conducted a series of clustering analyses using three datasets with a k-means++ clustering method. Each dataset included both RSES and one or two narcissism scales: (a) RSES and two types of narcissism scales ($N = 900$), (b) RSES and a grandiose narcissism scale ($N = 400$), and (c) RSES and a hypervigilant narcissism scale ($N = 600$). Based on the result of a preliminary cluster analysis performed on a RSES dataset extracted both from the three datasets mentioned above and other data sets ($N = 5,337$), we determined the number of clusters as five. The results of a cluster analysis of dataset (a) revealed that individuals who were in the "PSE-predominant self-evaluation cluster" (i.e., individuals who had high self-evaluation on the PSE items and low self-evaluation on the NSE items) exhibited a greater tendency for both grandiose and hypervigilant narcissism compared with those in the other four clusters. In contrast, individuals in the "NSE-predominant self-evaluation cluster" exhibited a reduced tendency for both grandiose and hypervigilant narcissism compared with those in the other clusters. Analyses of the other two datasets (b and c) revealed similar clusters to those in dataset (a). These results suggest that the relationship between self-esteem and narcissism can be better interpreted using a two-factor solution for RSES compared with using an average score of all items of the RSES.

キーワード : Self-esteem, Narcissism, Rosenberg self-esteem scale

問題と目的

本研究の目的は、Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self-Esteem Scale; RSES) を一般的に用いられる単因子構造として用いるのではなく、肯定的な評価と否定的な評価の 2 因子構造として考えることで、自尊感情と自己愛との関連性について新たな解釈を提案することにある。

自尊感情と自己愛

自尊感情と自己愛は概念的弁別性があるとされる一方で、データ上ある程度の関連性があることが問題となってきた。自尊感情と自己愛を測定する方法は基本的に心理尺度によるが、両尺度の関連を検討したメタ分析では、自尊感情と自己愛は $\rho = .36$ ($SD = .04$) の正の相関関係にあることが示されている (岡田, 2009)。高い相関ではないものの、関連性がないとは解釈できない結果と言えるだろう。特に問題とされるのは、高い自尊感情を持つ個人の好ましくない行動様式が指摘されており (Baumeister, Smart, & Boden, 1996)、自尊感情が高いことは、同じようにそのような行動の原因となる自己愛と、肯定的な自己評価が高いという意味において似ていると解釈される (中山, 2008) という点である。

ここで両概念について整理しておく。Rosenberg (1965) によると、自尊感情は自己に対する肯定的ないしは否定的な評価態度、であり、個人が自分に対して行う全般的な自己評価のことを指し示している。また、自尊感情が高いことは、とても良い (very good) という評価ではなく、これで十分 (good enough) という評価である。一方、自己愛という語は、誰もが持ち合わせている健全な範疇で自分を愛するという意味から、パーソナリティ障害として説明される不健全な意味のものまでを含む一般的なパーソナリティ傾向を指すと考えられるが、本稿では、高自尊感情者と自己愛者に共通して望ましくない心理特性を認めることについて議論するため、不健全な意味で自己愛という語を用いることにする。本稿で扱う自己愛者は所謂、ナルシストであり、「誇大性 (空想または行動における)、賞賛されたい欲求、共感の欠如の広範な様式」 (American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会訳, 2014) を呈する者である。

自尊感情と自己愛の概念的弁別性は、他者との関係性において階層的視点を持つかどうか、という点にあると考えられる (Brummelman, Thomaes, & Sedikides, 2016)。上述したように、高い自尊感情をもつことは他者と比べて優れている必要はなく (Rosenberg, 1965)、単に自分に対して必要十分の評価を持っていることを意味するが、自己愛は他者と比較して自分が優れていると思っており、そのために、現実よりもはるかに高い、誇大な自己評価をする。

Brummelman et al. (2016) は、自己愛者が優越感を持つと同時に他者からの賞賛を求める理由として、彼らの優越感が、誰かが優れていれば誰かが劣っているというゼロサムゲーム状態のものであり、不安定なためであるとしている。柏瀬 (1989) は、臨床的に重要な点として誇大な自己の重要性の認識はしばしばその逆の無価値感にとって代わることを指摘している。また、市橋 (2015) によると、自己愛の「基本病理は『思い描いている自分』と『取柄のない自分』という2つの病理的な自己しか存在しない」、「『等身大の自分』の欠如」というように説明されている。こういった誇大性の裏に否定的自己像が隠れているという自己愛者の特徴は、多くの研究者の共通理解である (上地, 2004, p.29)。

2 種類の自己愛

自己愛者には「誇大性 (空想または行動における)、賞賛されたい欲求、共感の欠如」 (American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会, 2014) がみられるが、その対人関係上の行動様式には異なる 2 種類があるとされる。2 種類の自己愛は、周囲を気にかけず傷つきにくい無関心型

(oblivious) と、周囲を気にかけ傷つきやすい過敏型 (hypervigilant) である (Gabbard, 1994 館訳 1997)。より具体的には、無関心型自己愛は、他人の反応に気がつくことはなく、傲慢で攻撃的であり、自己に夢中であり、注目の中心であろうとする、といった行動傾向を持つ一方、過敏型自己愛は、他人の反応に過敏であり、抑制的で内気で自己消去的でさえあり、自己よりも他人に注目を向け、注目的となることを避ける、といった行動傾向を持つとされる (Gabbard, 1994 館訳 1997)。このように、両極端ともいえる行動様式を持ちながらも、この 2 種類の自己愛はどちらも自己評価の維持に執着する点において共通している (Gabbard, 1994 館訳 1997) とされ、自己愛の中心要素には、過度に肯定的な自己評価を維持しようとする (中山, 2011, p.57) という点を挙げることができる。また、Gabbard (1994 館訳 1997) は自己愛的な人物の多くは 2 種類の自己愛の特徴をあわせもつとしており、この観点からも自己愛の基本的性質に、過度に肯定的で傷つきにくい性質と過度に否定的で傷つきやすいという両極端な性質の併存が考えられる。

自尊感情の 2 因子

ここで自尊感情に関する議論に戻す。既に述べたように自尊感情の定義は自己に対する肯定的ないしは否定的な評価であるが、実際の RSES による測定では、肯定的か否定的かは一次元上で測定される。RSES は 5 項目の肯定的な項目と 5 項目の否定的項目 (逆転項目) によって構成されるが、普通、自尊感情得点と言った場合には逆転項目を逆転処理した上で、10 項目を単純加算する。この処理は RSES が一次元性を保った尺度であるとするならば当然のことであり、自尊感情得点が高ければ自己に肯定的で、自尊感情得点が低ければ自己に否定的と考えられる。

しかしながら、本来であれば単因子構造として使用されている RSES について、肯定的な項目群因子 (Positive Self-Esteem; PSE) と否定的な項目群因子 (Negative Self-Esteem; NSE) が得られる事例が度々報告されている (Boduszek, Hyland, Dhingra, & Mallett, 2013; Carmines & Zeller, 1979; Marsh, Scalas, & Nagengast, 2010; Michaelides, et al., 2016; Mullen, Gothe, & McAuley, 2013)。日本においても、探索的因子分析を用いた遠藤・井上・蘭 (1992) による報告に始まり、より高度なモデルを用いた共分散構造分析による報告 (福留・森永, 2018; 清水・吉田, 2008) や、中学生を中心的な関心にしつつ幅広い世代で多母集団の同時分析を行った報告 (福留他, 2017) が両因子の存在について言及している。これらの報告は、分析上 RSES に PSE と NSE を想定することが可能であることを示している。そしてこれらの点を考慮すれば、従来議論されてきた自尊感情と自己愛という関係性について、新たに、自尊感情の 2 因子と自己愛の関連性という視点で検討ができる。

NSE¹ については PSE に比べ心理尺度上の精神的健康との関連が強い傾向にあり (福留・森永, 2018; Lindwall et al., 2012)、ストレスの窓モデル (藤田・福留・古口・小林, 2018) におけるストレス防御因子とされている。

自尊感情の 2 因子と無関心型自己愛

自尊感情の 2 因子と無関心型の自己愛との関連については小塩 (1997) の報告が初出であると思われる。小塩 (1997) では、本研究の PSE に相当する因子と自己愛の関連が $r = .41$ 、NSE と (無関

¹ 本稿で NSE と表記した場合は、逆転処理を済ませた上での値を指し示している。つまり NSE が高いということは自尊感情が高いことを意味する。

心型の) 自己愛の関連が.25であると報告しており, RSESの2因子と自己愛の関連には小さいながらも, 関連の差の存在が読み取れる。これについて, 福留・森永(2018)はPSEと自己愛の関連は若年齢層(15—22歳)で $r = .414$, NSEと自己愛は $r = .046$ と報告している。

そもそもPSEが高いというのは, 質問項目によって提案された肯定的な自己像を受容する傾向が強いことであり, そのうちのいくらかの人が自己愛的で, 自己の重要性を誇大にないしは妄想的に捉えていることを, 測定上許容していると理解できる。つまり, PSEという項目は, 健全なレベルの肯定的自己像を持っている人と, 不適切に高いレベルの肯定的自己像を持っている人の両者に対して, 同程度の尺度得点を返す性質をもっている。一方, NSEが高いというのは質問紙項目によって提案された否定的な自己像を拒否する傾向が強いことである。直感的には, 自己愛的な人であればNSEも当然のように高くなるだろう(否定的自己像を拒否する傾向が高い)と考えられるが, そう予想しない点が本研究における重要な点である。

質問紙によって提案された否定的な自己像は自己愛者に対して, 自己愛的でない人より批判的に働きかけ, それを受け入れてしまうという自己の不安定性, 矛盾を抱えているものであると予想する。NSE項目は, 誇大性の裏に隠された自己の無価値観, 劣等感, 周囲を気にかけて傷つきやすい過敏型といった性質を反映するだろう。ここで, これまでの議論を総合すれば, 「肯定的評価でもあり否定的評価でもあるといったアンビバレントな自己評価」(溝上, 1999)のタイプを想定しており, 溝上(1999)では自尊感情の2因子が用いられたわけではないが, そういった自己評価の存在が既に指摘されている。本研究では, 自尊感情の2因子によるアンビバレントな自己評価と自己愛が関連することを予想し検討する。自己愛者にとってPSE項目は, 「思い描いている自分」の受容を促すものであり, NSE項目は「取柄のない自分」に対する自己卑下を反映するだろう。

もしそうであれば自己愛とNSEには負の相関関係が得られても良いが, 実際はそうではなく弱い正の相関(小塩, 1997)あるいは有意でない正の相関(福留・森永, 2018)が得られる。しかしながら, この相関関係の議論はあくまでも全体的な傾向であり, 自己愛者はそのうちの多数派ではないだろう。実際, 自己愛型パーソナリティ障害とされる人は, 非臨床サンプル中の0—6.2%(Dhawan, Kunik, Oldham, & Coverdale, 2010), 0.96—6.18%(Trull, Jahng, Tomko, Wood, & Sher, 2010)もしくは1%未満(Torgersen, Kringlen, & Cramer, 2001)と考えられており, 自己愛的な人と呼べる人は相対的に少ないと思われる。したがって, 変数間の相関係数を明らかにしただけでは, その中に僅かに含まれる自己愛者の特徴は全体的な影響によって消えている可能性がある。したがって本研究では, 自己愛者の自己評価の様相としてPSEが高くNSEが低いと想定し, クラスタ分析を行う。

次に, PSEとNSEがともに高い人はどのような人か考える。そのような人は自己評価に一貫性があり, 優越感から生まれる自己の無価値感も存在しない。NSEが高いことは自己愛的な評価様相と異なり, このような人を単に自己評価が高い人と言い表すことができると考えられる。

自尊感情の2因子と過敏型自己愛

ここまで無関心型の自己愛と自尊感情の2因子との関連を中心に議論してきたが, 過敏型の自己愛と自尊感情の2因子にはどのような関連が予想できるだろうか。過敏型の自己愛者とは, 周囲を気にかけて傷つきやすい人のことである。したがって全体的な傾向としては, 過敏型の自己愛は否定

的な自己像が提案される NSE との負の関連が予想される。しかし、自己愛者の基本的病理がアンビバレントな自己評価にあるとするならば、過敏型の自己愛者についても、無関心型の自己愛者と同様に PSE が高く NSE が低いという状態が予想される。

以上の議論を踏まえ本研究では、RSES を 2 因子とした場合に想定される自尊感情のパターン(群)を想定した上で、2 種類の自己愛との関連を検討する。例えば、PSE と NSE がともに高い人或いは低い人、そして両者が中程度の高さの人の存在が考えられる。さらに、PSE が高く NSE が低い或いはその逆の人の存在を想定した上で、クラスター分析を行う。これによって、自尊感情の 2 因子の関係性から自己愛を説明できるかどうか検討することができる。

分析の方針

本稿では自尊感情尺度の因子分析に中心的な興味を置いていないので、因子構造に関するモデル比較を全て省略する。PSE は肯定的項目 5 項目の項目平均値、NSE は否定的項目のうち番号 8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた 4 項目の逆転処理済みの項目平均値、としてそれぞれ算出する。項目番号 8 は概念の定義上不適切な項目或いは因子負荷量が低いとされるためである(福留他, 2017; 福留・森永, 2018; 田中, 2006)。また、参考として挙げる SE (単因子構造とした場合の自尊感情)についても項目番号 8 を除いた 9 項目によって算出する。

分析手順を述べる。まず予備的分析として、自尊感情尺度を用いた複数のデータセットを用いてクラスター分析を行う。このことによって、サンプル数を十分に確保した上で、自尊感情尺度のみで類型化した場合の傾向がわかる。第二に、誇大性-過敏性自己愛尺度を用いて自尊感情の 2 因子との関連性をクラスター分析によって検討する(分析 1)。しかしながら、誇大性-過敏性自己愛尺度は、2 種類の自己愛について簡潔に測定するのに向いているが、それぞれの自己愛の下位因子まで詳細に検討することができない。そこで最後に、2 種類の自己愛についてそれぞれ別の尺度を用いて下位因子についてより詳細に検討を行う(分析 2a, 2b)。

予備的分析

ここでは自尊感情尺度のみについて、クラスター分析を行い PSE と NSE による自己評価の類型化について予備分析をおこなう。可能な限り大きなサンプルサイズでの分析を行い、自尊感情尺度単体で解釈可能なクラスターを抽出する。

方法

2014 年から 2018 年にかけて取得した以下のデータセットを用いてクラスター分析を行う。いずれも邦訳版ローゼンバーグ自尊感情尺度 10 項目 5 件法(山本・松井・山成, 1982, 清水(2001)を参照)が含まれた調査であり、当該部分について併合したものを分析する($N = 5337$)。選択肢は、あてはまらない、ややあてはまらない、どちらともいえない、ややあてはまる、あてはまる、であった。

データセットの説明² データ 1：中学生（ $N=430$ ），データ 2：大学生（ $N=177$ ），データ 3：ネット調査による日本全国の 18 歳—25 歳（ $N=400$ ）分析 2a において再使用，データ 4：ネット調査 15 歳—69 歳（ $N=2830$ ），データ 5：ネット調査 18 歳—25 歳（ $N=600$ ）分析 2b において再使用，データ 6：ネット調査 15 歳—69 歳（ $N=900$ ）分析 1 において再使用。

結果

RSES に 2 因子を仮定して確認的因子分析を行った結果，適合度は $\chi^2 = 1270.135$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .943, GFI = .945, RMSEA = .095 であったため，許容できる値であると判断した。また，PSE と NSE の共分散の標準化係数は .58 であった。単因子構造としての自尊感情（self-esteem; SE）を含んだ各変数の記述統計を Table 1 に示した。いずれの変数の平均も理論的中央値である 3 の周辺の値となった。また，NSE の尖度が負の値を示していることから，SE や PSE よりも分布の裾が広いことがわかる。

次に，RSES の 2 因子を用いてクラスター分析（kmeans++（Arthur & Vassilvitskii, 2007）を R 3.4.4（R Core Team, 2018）上でパッケージ LICORS 0.2.0（Goerg, 2013）を用いて実行）を行った結果，解釈可能な 5 クラスター（Figure 1）が得られた。縦軸は Z 得点である。クラスター 1 は PSE が低く NSE が高い群，クラスター 2 は PSE と NSE がともに低い群，クラスター 3 は PSE と NSE がともに高い群，クラスター 4 は PSE が高く NSE が低い群，クラスター 5 は PSE と NSE とともに中程度の群であった。各クラスターの人数はクラスター番号順に 370, 803, 1318, 797, 2049 であった。

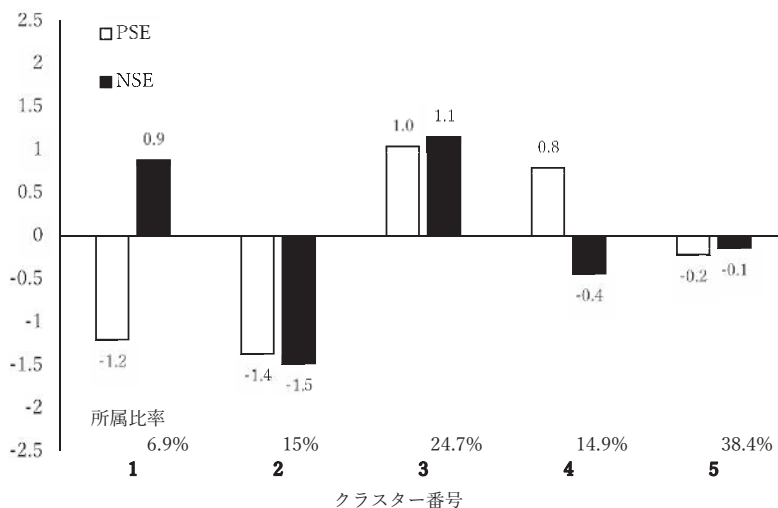


Figure 1. 予備的分析のクラスター分析結果

² 本論文ではインターネット調査によるデータ収集が行われているが，一貫して楽天リサーチ株式会社（現在：楽天インサイト）に第一著者が依頼した。これによって異なる質問紙調査間で同一参加者が参加できないよう，配信対象者から除外することができた。また，楽天リサーチ株式会社が一般社団法人日本マーケティング・リサーチ協会に所属し，プライバシーマークを取得している点を考慮して調査を依頼した。調査参加の承諾については調査会社の方法によって得，研究者は個人を特定できる情報取得を行っていない。

Table 1 RSESの記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	5337	3.11	0.78	0.27	-0.17
PSE	5337	3.18	0.84	0.13	-0.26
NSE	5337	3.04	0.95	-0.26	-0.08

考 察

自尊感情の2側面、PSEとNSEについては、相関係数が高い場合も多く、本データセットにおいても、PSEとNSEの相関は中程度あったが、クラスター分析をした際には、解釈可能な5クラスターを得ることができると考えられる。これを踏まえれば、以降のデータ分析ではクラスター数を5に設定して分析することができるものと思われる。

分析 1

評価過敏性－誇大性自己愛尺度（中山・中谷，2006）を用いて自尊感情の2因子との関連を検討する。中山・中谷（2006）は、誇大性と評価過敏性により、自己愛を誇大型、混合型、過敏型、低自己愛群と類型化した。本尺度の誇大性と評価過敏性は2種類の自己愛（Gabbard, 1994 舘訳 1997）を測定するものであって、それぞれ無関心型と過敏型に相当する。本研究では自尊感情の2因子と2種類の自己愛を同時に分析し、自尊感情と自己愛の関連性について検討する。予備分析に基づき、クラスター数を5に指定して分析を実行する。本分析の予想は、PSEが高くNSEが低い群において2種類の自己愛が最も高いという結果である。

方 法

分析対象者 インターネット調査会社（楽天リサーチ）を通じ、調査に参加した15歳から69歳の900名（男性440名，女性460名）。平均年齢は36.78（SD = 16.09）であった。

調査時期 2018年2月実施。

質問項目 (a) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982，清水（2001）を参照）による10項目5件法を使用した。(b) 評価過敏性－誇大性自己愛尺度（中山・中谷，2006）による18項目5件法を使用した。この後に本研究で使用しない質問項目が続いていた。

結 果

RSESについて2因子を仮定した確認的因子分析を行った結果、適合度は $\chi^2 = 248.640$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .946, GFI = .937, RMSEA = .098, また、評価過敏性－誇大性自己愛尺度の確認的因子分析の結果、適合度は $\chi^2 = 914.963$, $df = 134$, $p < .001$, CFI = .895, GFI = .889, RMSEA = .081であり、それぞれ許容できる値と判断した。各変数の記述統計をTable 2に、各変数の相関係数をTable 3に示した。各変数の平均は、おおむね理論的中央値である3に近い値となった。NSEのみ尖度が負となっていることから、NSEの分布の裾は比較的軽いことが分かる。

Table 2 分析1, 各変数の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	900	3.06	0.72	0.33	-0.21
PSE	900	3.20	0.86	0.14	-0.33
NSE	900	3.03	0.99	-0.34	-0.06
誇大性	900	2.72	0.70	0.55	-0.23
評価過敏性	900	2.87	0.79	0.17	-0.07

Table 3 誇大性－評価過敏性自己愛尺度と自尊感情の相関係数

	SE	PSE	NSE	誇大性	評価過敏性
SE					
PSE	.83 **				
NSE	.87 **	.48 **			
誇大性	.54 **	.59 **	.35 **		
評価過敏性	-.47 **	-.23 **	-.55 **	.06	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

評価過敏性と誇大性の相関は有意でなかった。PSE と誇大性は.59 の相関がある一方で、NSE と誇大性は.35 の相関であった。PSE と評価過敏性は-.23 の相関である一方で、NSE と評価過敏性は-.55 の相関があった。SE と誇大性は.54 の相関、SE と評価過敏性は-.47 の相関があった。

クラスター分析の結果、クラスター1 は全て変数が中程度の値の群、クラスター2 は PSE と NSE の両方が中程度であるが、誇大性も評価過敏性も低い群、クラスター3 は PSE と NSE がともに高い群、クラスター4 は PSE と NSE、誇大性がともに低いが、評価過敏性が高い群、クラスター5 は PSE が高いが NSE が中程度であり、誇大性と評価過敏性の両方が高い群である。各クラスターの人数はクラスター番号順に、360, 127, 197, 141, 75 であった。

考 察

PSE と NSE の記述統計については予備的分析と似た傾向にあり、平均はおよそ理論的中央値である 3 であり、分布の裾は PSE よりも NSE の方が軽いことがわかった。中山・中谷 (2006) では、評価過敏性と誇大性の相関は $r = .14$ であったが、本研究では $r = .06$ であった。これは、中山・中谷 (2006) の因子分析で直行解が報告されていることから、想定された概念関係の通りであるという意味において望ましい結果であると思われる。相関係数からも、PSE は誇大性と、NSE は評価過敏性とより関連が強いことが示された。この結果も本研究の想定通りであるが、これはあくまでも全体的な傾向である。

変数間の相関関係は、予想された通り、PSE と誇大性の関連が NSE と誇大性よりも強い関連にあ

ることを示しており、また、NSEと評価過敏性の関連がPSEと評価過敏性よりも強い関連にあった。したがって、自尊感情の2因子は2種類の自己愛との関連において弁別性があるものと解釈され得る。さらに、SEと2種類の自己愛の相関よりも、PSEやNSEと2種類の自己愛の相関が、わずかではあるが相関係数が高いことから、サンプルの全体的な傾向を議論する上でも、自尊感情は自己愛との関連を検討する上では、2因子として解釈した方が良いと思われる。

クラスター分析の結果は、予備的分析で得られたほど顕著な傾向、すなわちPSEが高くNSEが低いクラスターやPSEが低くNSEが高いクラスターが明白に得られたとは言えないだろう。しかしながら、PSEとNSEのどちらがより高いか、というような両変数のバランスの問題は予備的分析の結果と似ている傾向にあり、クラスター2をNSE「優勢」群、クラスター5をPSE「優勢」群として命名することに、一定の妥当性があるものと考えられる。そしてNSE優勢群では誇大性と評価過敏性の両方が低い結果が得られており、PSE優勢群では誇大性と評価過敏性の両方が最も高い結果が得られている。興味深い点は、クラスター3のPSEとNSEがともに高い群の自己愛は、PSE優勢群に比べて決して高くはない点であり、評価過敏性においては低い値となっている。自尊感情を単因子構造とみなし得点化した場合においては自尊感情が高い人の中に自己愛傾向が高い人が含まれているという解釈が通常であるが、本研究におけるクラスター5については、自尊感情がそれほど高くはない人の中に自己愛が高い人が含まれているという解釈が可能である。

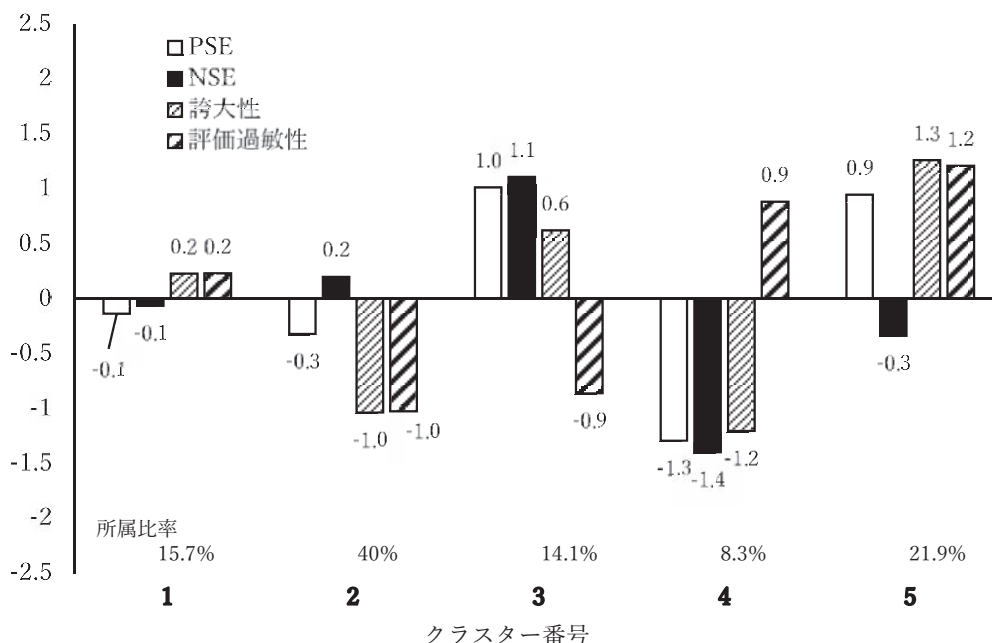


Figure 2. 分析1のクラスター分析結果

分析 2a

分析 1 では PSE と NSE のバランスが 2 種類の自己愛と関連する結果が得られた。それは NSE に比べて PSE 優勢な自己評価をもつ人は 2 種類の自己愛が高いと考えられる結果であった。

分析 1 で使用した中山・中谷 (2006) による尺度の問題点を挙げるならば、それは数ある自己愛の下位側面を要約していることであろう。そこで、分析 2a では NPI-35 (小西・大川・橋本, 2006) を用いて、無関心型の自己愛における下位尺度と自尊感情の 2 因子のクラスター分析を行う。そして分析 2b では過敏型に着目した分析を行う。

また、分析 1 の分析のみでは結果の再現性についても多少疑問が残る。分析 1 で選択された尺度や、2 種類の自己愛を同時に検討したことによって得られた結果であるとも考えられるためである。この意味においても分析 2a 及び 2b として検討を追加して検討する意義が認められると思われる。

研究 2a において予想される結果は、無関心型の自己愛は NSE よりも PSE と強い正の相関関係にあり、分析 1 のクラスター 5 に見るような PSE 優勢群において無関心型の自己愛が最も高いという結果である。

方 法

分析対象者 インターネット調査会社 (楽天リサーチ) を通じて調査に参加した日本全国の 18 歳から 25 歳の 400 名 (男性 200 名, 女性 200 名)。平均年齢は 22.82 歳 ($SD = 1.96$) であった。

調査時期 2016 年 3 月

質問項目 以下の質問項目を含んだ調査を実施した。(a) Rosenberg 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982, 清水 (2001) を参照), (b) 自己愛人格傾向尺度 NPI-35 (小西・大川・橋本, 2006) を 5 件法で使用した。なお、選択肢の表現は自尊感情尺度と合わせ、あてはまらない、ややあてはまらない、どちらともいえない、ややあてはまる、あてはまる、とした。

結 果

RSES に 2 因子を仮定した場合の適合度は、 $\chi^2 = 74.297$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .969, GFI = .960, RMSEA = .068 であった。また、自己愛性人格傾向尺度 NPI-35 の結果は、 $\chi^2 = 1722.542$, $df = 550$, $p < .001$, CFI = .863, GFI = .779, RMSEA = .073 であった。NPI-35 について CFI, GFI が十分な値であるとは言い難いが、尺度の項目数が多く df が大きいことを考慮すれば許容できるものと判断した。

各変数の記述統計量は Table 4 に、相関係数は Table 5 に示した。RSRS の各変数の平均値はおよそ 3 であり、NSE は 2.87 と少し低めであるが、PSE よりも NSE の裾が軽いなど、基本的にはこれまでと似た傾向にあった。相関では PSE と自己愛の下位因子との関連が .40 から .60 であり、NSE と自己愛の .10 から .30 よりも高い相関が得られた。また、SE と自己愛の関連については .34 から .53 であった。

Table 4 RSESとNPI-35の下位因子の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	400	2.94	.81	.00	-.15
PSE	400	3.00	.88	-.22	-.18
NSE	400	2.87	1.00	-.50	-.02
誇大性	400	2.33	.89	.02	.45
身体賞賛	400	2.20	.99	-.18	.58
注目欲求	400	2.78	.82	.08	.12
主導性	400	2.49	.84	.07	.33
自己確信	400	2.93	.70	.84	.07

Table 5 NPI-35の下位因子とRSESの相関

	SE	PSE	NSE	誇大性	身体賞賛	注目欲求	主導性
SE							
PSE	.88 **						
NSE	.86 **	.51 **					
誇大性	.48 **	.53 **	.28 **				
身体賞賛	.34 **	.40 **	.18 **	.70 **			
注目欲求	.34 **	.47 **	.10 **	.72 **	.56 **		
主導性	.53 **	.60 **	.30 **	.85 **	.67 **	.74 **	
自己確信	.41 **	.54 **	.16 **	.65 **	.46 **	.58 **	.68 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

クラスター分析の結果 (Figure 3), クラスター1はPSEが高くNSEが中程度の群であり自己愛の下位因子が一様に高かった。クラスター2はPSEとNSEともに低いがPSEの方がより低い群であり自己愛の下位因子が一様に低かった。クラスター3はPSEとNSEはともに中程度であるがやや低い群であり自己愛もやや低めであった。クラスター4はPSEとNSEが中程度の群であり自己愛の下位因子は中程度からやや高かった。クラスター5はPSEとNSEがともに高い群であり誇大性、身体賞賛注目欲求は中程度、主導性や自己確信がやや高い程度であった。それぞれの所属人数はクラスター番号順に、24, 69, 116, 119, 72であった。

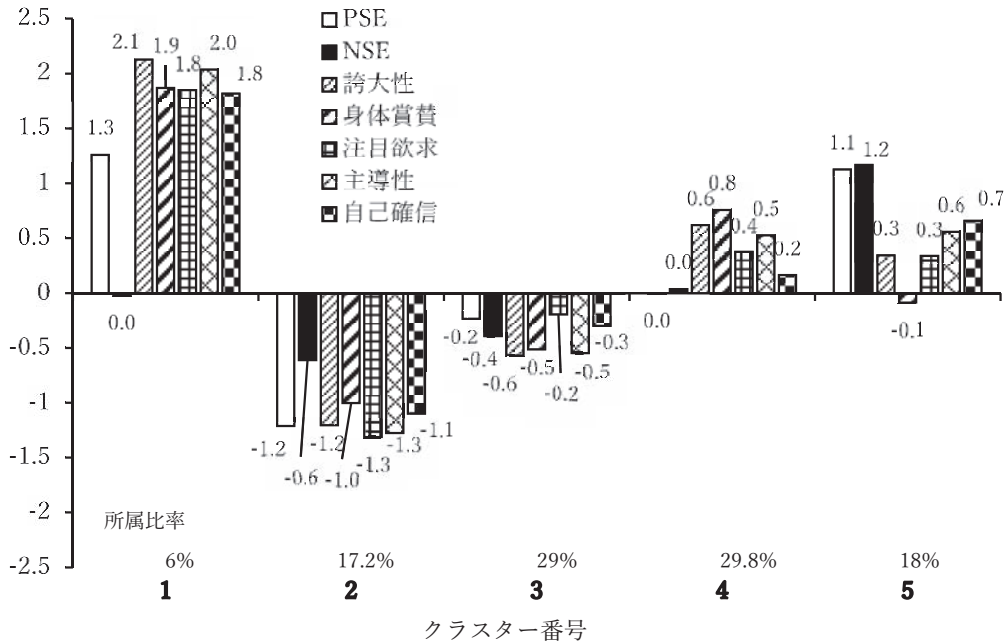


Figure 3. 分析 2a のクラスター分析結果

考 察

相関関係は、PSEの方がNSEよりも自己愛とより強く関連することが明らかになった。また、このPSEと自己愛の関連は、NSEと自己愛の関連よりも、全ての自己愛下位因子において高かった。しかし、これは全体的な傾向であるので、以下に述べるクラスター分析の結果が優先される。

クラスター分析の結果は予備的分析に見たようなPSEとNSEのバランスによる明快な群分けとはならなかった。特にクラスター3と4ではRSESにおいて大きな差があるとは解釈できない。しかしながら、分析1で述べたようにクラスター1はPSE優勢群、クラスター2はNSE優勢群、クラスター5はPSE・NSE高群という解釈は可能である。分析1と基本的な傾向は似ており、特に、PSEとNSEがともに高いクラスター5が、自己愛の下位因子が最も高い群とはならなかった点は注目できる。自己愛が最も高い群はPSE優勢群であるクラスター1である。これらの結果から、自己愛者はPSEとNSEのバランスが崩れPSEが高い状態にあると思われる。クラスター2や5から、NSEがPSEと同程度に高い、あるいはNSEがPSEよりも高い状態にある場合は、自己愛が高くない傾向にあると思われる、その意味において、NSEはPSEよりもより健全な自己評価の高さを測定している可能性があるものと思われる。

下位因子について言及できる点は、自尊感情（単因子）が高い群であるクラスター5において、身体賞賛が平均的ということである。つまり、特に身体賞賛の傾向については、そのほかの下位因子に比べて、自尊感情（単因子）が高い人に認められる傾向ではないと思われる。

分析 2b

ここでは、コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下，2005；2009）を用いて、過敏型の自己愛における下位尺度と自尊感情の2因子のクラスター分析を行う。自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下，2005）は主に過敏型の自己愛について測定する尺度であり、本研究では短縮版（上地・宮下，2009）を用いる。そもそも自尊感情と過敏型自己愛の相関は-.40 という報告があるが（小塩・中山・清水，2011）³，自尊感情の2因子と過敏型自己愛の関連については明らかでない。予想される結果は、最初に述べたように過敏型の自己愛は、PSEよりもNSEと強い負の相関関係にあり、分析1のクラスター5に見るようなPSE優勢群において最も過敏型自己愛が高いという結果である。

方法

対象者 インターネット調査会社（楽天リサーチ）を通じ、調査に参加した18歳から25歳の600名（男性300名，女性300名）。平均年齢は22.57歳（ $SD = 1.82$ ）であった。

調査時期 2017年1月実施。

質問項目 (a) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982，清水（2001）を参照）による10項目5件法を使用した。(b) 自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009）の20項目5件法を使用した。下位4因子に、承認・賞賛過敏性，自己顕示抑制，潜在的特権意識，自己緩和不全がある。このうち、自己緩和不全を除いた3因子について Gabbard（1994）の過敏型自己愛を測定していると見做すことができる（上地，2011）とされている。本稿の文脈上では自己緩和不全を削除して良いと思われるが、コフォートがこの点を自己愛問題の本質であると考えていた（上地，2011）ことから、削除せず尺度全体で分析する価値があると判断した。なお、この尺度の項目の提示順は参加者ごとにランダムにした。

結果

RSESの適合度は2因子構造で $\chi^2 = 180.554$ ， $df = 26$ ， $p < .001$ ，CFI = .931，GFI = .931，RMSEA = .100，AIC = 218.554，であった。また、自己愛的脆弱性尺度においても、十分な適合度が得られた（ $\chi^2 = 447.099$ ， $df = 164$ ， $p < .001$ ，CFI = .955，GFI = .928，RMSEA = .054）。次に、各変数の記述統計をTable 6，相関係数をTable 7に示した。PSEは自己愛的脆弱性の下位因子のうち自己顕示抑制においてのみ有意な相関関係を示した。NSEは脆弱性の下位因子の全てにおいて、-.25から-.48の有意な負の相関関係にあった。SEは脆弱性の下位因子と-.10から-.32の負の相関関係にあった。

³ ただし、自尊感情尺度の訳が本稿のものと異なる。

Table 6 RSESと自己愛的脆弱性の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	600	3.00	0.74	0.50	0.01
PSE	600	3.08	0.85	0.05	-0.08
NSE	600	2.90	0.93	-0.17	0.05
承認・賞賛過敏性	600	2.95	0.88	-0.27	-0.04
自己顕示抑制	600	2.96	0.88	-0.11	0.00
潜在的特権意識	600	2.72	0.82	0.22	0.23
自己緩和不全	600	2.80	0.94	-0.35	0.11

Table 7 RSESと自己愛的脆弱性の下位因子の相関

	SE	PSE	NSE	承認賞賛	顕示抑制	潜在特権
SE						
PSE	.86 **					
NSE	.81 **	.40 **				
承認・賞賛過敏性	-.32 **	-.08	-.48 **			
自己顕示抑制	-.34 **	-.12 **	-.47 **	.71 **		
潜在的特権意識	-.11 **	.06	-.27 **	.68 **	.52 **	
自己緩和不全	-.10 *	.07	-.25 **	.71 **	.54 **	.64 **

注) 列の変数名は適宜省略している。

* $p < .05$, ** $p < .01$

クラスター分析の結果 (Figure 4), クラスター1はPSEとNSEがともに低い群であり自己顕示抑制がやや高く、潜在的特権意識と自己緩和不全がやや低い群であった。クラスター2は全変数中程度の群であった。クラスター3はPSEは中程度でNSEは低い群であり、自己愛的脆弱性の下位因子が全て高い群であった。クラスター4はPSEとNSEがともに高い群であり、承認・賞賛過敏性と自己顕示抑制がやや低い群であった。クラスター5はPSEは中程度であるがNSEがやや高く、自己愛的脆弱性の下位因子が全て低い群であった。各クラスターサイズは番号順に 78, 220, 97, 92, 113であった。

考 察

自尊感情と自己愛的脆弱性の相関関係は、自尊感情をPSEとNSEに分けることで、新たな発見があった。つまり、PSEよりもNSEの方が、自己愛的脆弱性と強い関連がある結果が得られ、その程度は従来用いられてきたSEよりも大きかったことである。したがって、自尊感情の2因子は自己愛的脆弱性との関連において弁別され得ることが明らかとなった。しかし、これは全体的な傾向であって、以降に述べるクラスター分析の結果が優先される。

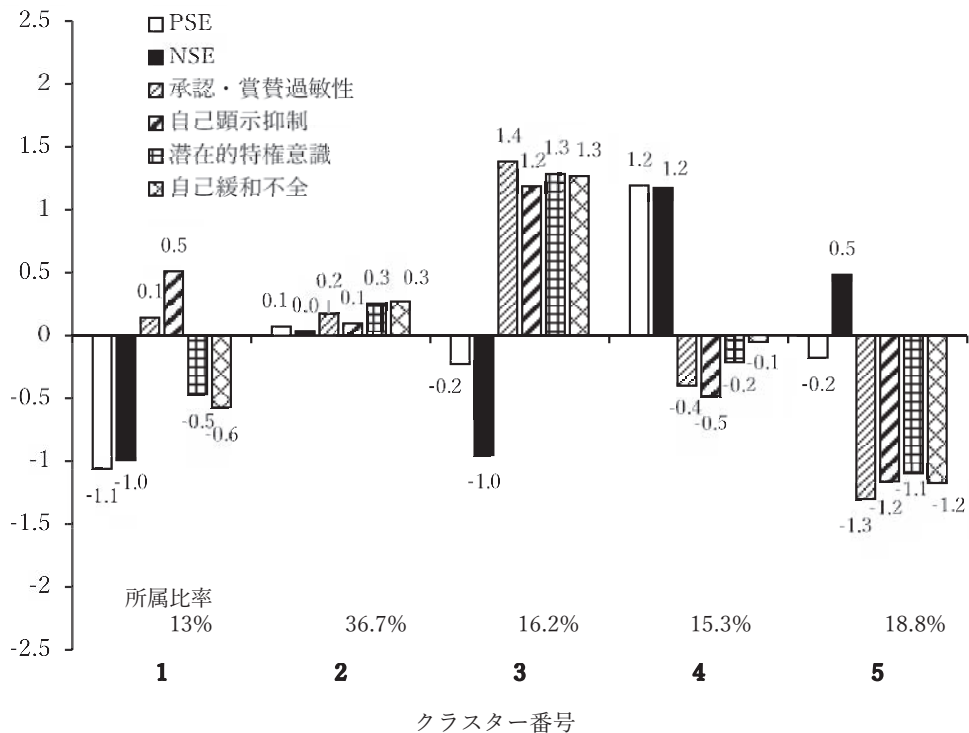


Figure 4. 分析 2b のクラスター分析結果

PSE と NSE がともに低い群（クラスター1）においては自己顕示抑制がやや高い程度で、潜在的特権意識と自己緩和不全についてはやや低かった。従来の自尊感情（単因子）の考え方では PSE と NSE がともに低い群で過敏型の自己愛が高いという結果も予想できるが、本分析の結果（クラスター1）はそれを支持する結果ではなかった。その一方で、PSE と NSE のバランスが悪く NSE よりも PSE の方が高い PSE 優勢群（クラスター3）で、最も過敏型の自己愛が高い結果が得られた。また、最も過敏型の自己愛が低いのは、PSE と NSE のバランスが悪く NSE が PSE よりも高い NSE 優勢群（クラスター5）であった。

以上のことから、過敏型の自己愛についても、PSE が NSE に比べて優勢な人において最も高い傾向にあり、その一方で PSE と NSE がともに低い人（或いは両方が高い人）において顕著な傾向が認められるというわけではなかった。この傾向は、自己愛の種類は異なるが分析 2a と同様であり、PSE 優勢型のアンビバレントな自己評価と自己愛が関連することを示すものであると思われる。

総合考察

自尊感情と自己愛傾向の関連は、変数間の相関関係の結果から考察した場合に、自尊感情を2因

子として解釈した方が良いことが明らかとなった。しかしながら、自尊感情と自己愛傾向の関連は単純な相関関係では十分には説明されない。なぜなら、自尊感情尺度に対してクラスター分析を行った場合に、PSEとNSEがアンバランスな個人が20—30%ほど存在することが明らかとなり、この点に着目することで自尊感情と自己愛の関連性について新たな説明を加えることが可能であったからである。特徴的な点としては、自尊感情をPSEとNSEの2側面を仮定した際に、この両者がともに高い群において最も自己愛が高いという結果が得られなかったことである。本研究は自尊感情尺度を単因子とした場合よりも、PSEとNSEの2因子として捉え、そのバランスに着目することで、安定的なパーソナリティである自己愛との関連を説明できる可能性を示している。

無関心型ないしは過敏型の自己愛が高い人の自己評価の様相というものは、肯定的なものと否定的なものでアンバランスな人、とりわけ、肯定的な自己像を受容する反応（PSE）が優位という意味で自己評価が高い。一方、否定的自己像を拒否する反応（NSE）が優位という意味で自己評価が高い人の自己愛傾向は低いと考えられる。また、PSEとNSEの両方が高いことは自己評価の一貫性の高さを意味しており、「単に自己評価が高い人」とも解釈できよう。あるいは、自己の実態に比べて良すぎるわけでも悪すぎるわけでもない「等身大の自分とその自己評価」を所有しているため自己愛者とは言えない、という説明も可能かもしれない。逆に、「単に自己評価が低い人」つまりPSEとNSEの両方が低い人は、分析2bの結果から、必ずしも過敏型自己愛の傾向が強くないことが示されており、2種類の自己愛の両側面においてPSEとNSEのバランスが重要な意味を持つ可能性を一貫して示唆しているものと思われる。ただし、本研究の結果は決して多くないデータセットから得られた傾向であって、本当に一貫した傾向が得られるかどうか今後も検討が必要である。また、本研究の限界として、質問紙法でアンビバレントな自己評価をした人は面接法においてもアンビバレントで自己愛的であると判定され得るのかどうか、あるいは実際に臨床群とされる確率はどの程度のものであるかといった検討をしていないことを挙げられる。

自尊感情は教育的目標としても使用される心理学的概念であるが、これを教育的目標とした場合には、自分の重要性を主張する尊大な人間を育成する可能性が懸念されているように思われる（例えば、国立教育政策研究所、2015）。この原因は、自尊感情と自己愛に相関が認められ共通の行動様式がみられたり、「自尊」感情について字義上の議論を行っていたりするためではないかと推察される。本稿における自尊感情の2側面の整理は、これらの議論に対して、自尊感情の議論は、ただ単純にその数値が高いか低いかというものに基づいて行われるべきでないことを提案しており、またその上で、これまで想定されていなかった数パーセントのタイプの人に着目することができる可能性を示唆しているものである。特に、NSEがPSEよりも優勢であることは、自己愛的でない人間像を想定する上で重要な点であると思われる。これに加えてNSEについては、藤田他（2017）によるストレスの窓モデルで明らかになっているように精神健康上重要な因子でもあることから、NSEが高いことは教育上好ましい傾向と理解することはできないだろうか。本研究の結果は、このような側面（NSE）に着目するような教育的取り組み、代表的には、川井・吉田・宮元・山中（2006）による「ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反駁の促進」の教育的重要性を傍証しているものと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders fifth edition*, Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.
- (米国精神医学会 日本精神神経学会 (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 高橋三郎・大野 裕 (監訳) 医学書院)
- Arthur, D. and S. Vassilvitskii (2007). k-means++: The advantages of careful seeding. In H. Gabow (Ed.), *Proceedings of the 18th Annual ACM-SIAM Symposium on Discrete Algorithms [SODA07]* (pp. 1027-1035). Philadelphia, PA: Society for Industrial and Applied Mathematics.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, *103*, 5-33. doi:10.1037/0033-295X.103.1.5
- Brummelman, E., Thomaes, S., & Sedikides, C. (2016). Separating narcissism from self-esteem. *Current Directions in Psychological Science*, *25*, 8-13. doi:10.1177/0963721415619737
- Boduszek, D., Hyland, P., Dhirga, K., & Mallett, J. (2013). The factor structure and composite reliability of the Rosenberg Self-Esteem Scale among ex-prisoners. *Personality and Individual Differences*, *55*, 877-881. doi:10.1016/j.paid.2013.07.014
- Carmines, E. G., & Zeller, R. A. (1979). *Reliability and validity assessment*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Dhawan, N., Kunik, M. E., Oldham, J., & Coverdale, J. (2010). Prevalence and treatment of narcissistic personality disorder in the community: A systematic review. *Comprehensive Psychiatry*, *51*, 333-339. doi:10.1016/j.comppsy.2009.09.003
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (1992). セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in clinical Practice: The DSM-IV Edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- (ギャバード, G. O. 館 哲郎 (監訳) (1997). 精神力動的精神医学—その臨床実践 DSM-IV版 3 臨床編: II軸障害 岩崎学術出版社)
- Georg M. G. (2013). LICORS: Light cone reconstruction of states predictive state estimation from spatio-temporal data. <https://cran.r-project.org/web/packages/LICORS/>
- 藤田尚文・福留広大・古口高志・小林 渚 (2017). ストレスの窓モデル—防御因子が制御する窓によるストレス反応の加算 教育心理学研究, *65*, 12-25. doi:10.5926/jjep.65.12
- 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林 渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の2側面—「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」 教育心理学研究, *65*, 183-196. doi:10.5926/jjep.65.183
- 福留広大・森永康子 (2018). 自己評価の尺度における肯定的項目群因子と否定的項目群因子に関する年齢別の分析—ローゼンバーグ自尊感情尺度と自己効力感尺度 教育心理学研究, *66*, 212-224.

doi:10.5926/jjep.66.212

- 市橋秀夫 (2015). 自己愛精神的構造に対する精神療法—自尊心の病理, 精神療法, 41, 322-326.
- 上地雄一郎 (2004). 自己愛の障害とその形成過程 上地雄一郎・宮下一博 (編) もろい青少年の心—自己愛の障害 発達臨床心理学的考察 北大路書房
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91. doi:10.2132/personality.14.80
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291. doi:10.2132/personality.17.280
- 上地雄一郎 (2011). 自己愛の臨床と実証研究の間 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 柏瀬宏隆 (1989). 自己愛パーソナリティー障害 青年心理, 73, 74-80.
- 川井栄治・吉田寿夫・宮元博章・山中一英 (2006). セルフ・エスティームの低下を防ぐための授業の効果に関する研究—ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反芻の促進 教育心理学研究, 54, 112-123. doi:10.5926/jjep1953.54.1_112
- 国立教育政策研究所 (2015). 「自尊感情」? それとも、「自己有用感」 生徒指導・進路指導研究センター (編) 生徒指導リーフ, 18. 2015年3月 Retrieved from <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf> (2018年12月4日)
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, 14, 214-226. doi: 10.2132/personality.14.214
- Lindwall, M., Barkoukis, V., Grano, C., Lucidi, F., Raudsepp, L., Liukkonen, J., & Thøgersen-Ntoumani, C. (2012). Method effects: The problem with negatively versus positively keyed items. *Journal of Personality Assessment, 94*, 196-204. doi:10.1080/00223891.2011.645936
- Marsh, H. W., Scalas, L. F., & Nagengast, B. (2010). Longitudinal tests of competing factor structures for the Rosenberg Self-Esteem Scale: Traits, ephemeral artifacts, and stable response styles. *Psychological Assessment, 22*, 366-381. doi:10.1037/a0019225
- Michaelides, M. P., Zenger, M., Koutsogiorgi, C., Brähler, E., Stöbel-Richter, Y., & Berth, H. (2016). Personality correlates and gender invariance of wording effects in the German version of the Rosenberg Self-Esteem Scale. *Personality and Individual Differences, 97*, 13-18. doi:10.1016/j.paid.2016.03.011
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム 金子書房
- Mullen, S. P., Gothe, N. P., & McAuley, E. (2013). Evaluation of the Rosenberg Self-Esteem Scale in older adults. *Personality and Individual Differences, 54*, 153-157. doi:10.1016/j.paid.2012.08.009
- 中山留美子 (2008). 肯定的自己評価の諸側面—自尊感情と自己愛に関する研究の概観から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 55, 105-125. doi:10.18999/nupsych.55.105
- 中山留美子 (2011). 自己愛の誇大性と過敏性 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究,

54, 188-198. doi: 10.5926/jjep1953.54.2_188

岡田 涼 (2009). 青年期における自己愛傾向と心理的健康—メタ分析による知見の統合— 発達心理学研究, 20, 428-436. doi: 10.11201/jjdp.20.428

小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究—自尊感情, 社会的望ましさととの関連— 名古屋大学教育學部紀要 心理学, 44, 155-163.

小塩真司・中山留美子・清水健司 (2011). 2種類自己愛モデル統合の試み—3つのモデルの相互関係— 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 207.

R Core Team (2018). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.

Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.

清水和秋・吉田昂平 (2008). Rosenberg 自尊感情尺度のモデル化—wording と項目配置の影響の検討— 関西大学社会学部紀要, 39, 69-97.

清水 裕 (2001). 自己評価・自尊感情 山本真理子 (編) 堀 洋道 (監修) 心理測定尺度集 1—人間の内面を探る— 自己・個人内過程 (pp.29-31) サイエンス社

田中道弘 (2006). Rosenberg の自尊心尺度の再検討 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 6, 135-139.

Torgersen, S., Kringlen, E., & Cramer, V. (2001). The prevalence of personality disorders in a community sample. *Archives of General Psychiatry*, 58, 590-596. doi:10.1001/archpsyc.58.6.590

Trull, T. J., Jahng, S., Tomko, R. L., Wood, P. K., & Sher, K. J. (2010). Revised NESARC personality disorder diagnoses: gender, prevalence, and comorbidity with substance dependence disorders. *Journal of Personality Disorders*, 24, 412-26. doi:10.1521/pedi.2010.24.4.412

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68. doi:10.5926/jjep1953.30.1_64

付 記

- 1) 本研究は JSPS 科研費 (JP16J03013) によって実現しました。ここに記して謝意を表します。
- 2) 調査に参加, 協力下さった皆様に御礼申し上げます。
- 3) 本論文で使用されたデータセットは, 分析 1 及び分析 2b の部分を除いて, 以下の論文で使用されたものを含む。いずれも第一著者が調査を主導したものであり, 本稿とは分析の観点が異なる。ただし, 方法の記述や尺度の確認的因子分析の結果, 信頼性, 記述統計に関する部分は完全に一致する部分がある。
 1. 藤田尚文・福留広大・古口高志・小林 渚 (2017). ストレスの窓モデル—防御因子が制御する窓によるストレス反応の加算, 教育心理学研究, 65, 12-25. doi:10.5926/jjep.65.12
 2. 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林 渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーク自尊感情尺度の2側面—「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」, 教育心理学研究, 65, 183-196. doi:10.5926/jjep.65.183
 3. 福留広大 (2017). ローゼンバーク自尊感情尺度の2側面に関する研究:「肯定的自己像の受容」

と自己愛, Well-being との関連, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 66, 151-157. doi:10.15027/44817

4. 福留広大・森永康子 (2018). 自己評価的尺度における肯定的項目群因子と否定的項目群因子に関する年齢別の分析—ローゼンバーグ自尊感情尺度と自己効力感尺度— 教育心理学研究, 66, 212-224. doi:10.5926/jjep.66.212